



筑紫女学園大学リポジット

太宰府高雄山の歴史的・人間環境学的研究 ～共生（ともいき）の視点から～

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2014-02-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 田村, 史子, 森, 弘子, TAMURA, Fumiko, MORI, Hiroko メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/203

太宰府高雄山の歴史的・人間環境学的研究 ～共生（ともいき）の視点から～

田 村 史 子・森 弘 子

Historical and Human-environmental Study of Mount Takao in Dazaifu: from the Viewpoint of Human Symbiosis

Fumiko TAMURA and Hiroko MORI

はじめに

本学は太宰府市の東南、筑紫野市との境にある高雄山（高尾山）（標高151.5m）の太宰府側山腹に位置している。その敷地全体は山頂に至る背後の森の部分を含め約8ヘクタール〔二万二千坪〕に及び、高雄山塊の数分の一を占める。残りの部分を、石穴神社と太宰府ゴルフ場と太宰府市の環境美化センター（不燃物処理場）が分かち有する。かつてこの山は、原生林を残す石穴神社の社叢の部分を除き、農民たちがその生活と農業活動のために改変し再生させながら繰り返し用いてきた「里山」¹であり、人々がともに利用する入会地^{いりあいち}であった。それが、現在のような状態に大きく変容するのは1960年代のことである。

本稿は、高雄山を含む地域の歴史的変遷を調査し、その一部に本学があることの人間環境学的な意味を探ろうとする研究の、初段階の報告である。古代から多くの人々と文物が往来した道に面し、稲作を中心とする農村社会に欠かすことのできない「里山」として役割を果たしていたこの山は、頂上に、「大行事」の石碑の立つ小さな鎮守の杜を持ち、ここに、自然とともに生き、自然の中に神を感じていた人たちの生活があったことを示している。その、時間的空間的に蓄積された人間の営みという文化の総体は、今ここに学びの舎を営む我々にいろいろなことを問いかけている。長い歴史を持ち、人々との豊かな共存の可能性を秘める自然の中にある大学が、現代社会に対してどのように貢献できるのかを考えようというのが、この研究の最終目的である。

本稿の、〔Ⅰ．高雄山をめぐる歴史〕は、古代からの文献に高雄山にかかわる記述を探し、また、古くからこの地域に住む人たちへの聞き取り調査を行って、森弘子が担当した。〔Ⅱ．高雄

山の環境変化] は、近年どのように山が変化していったかの聞き取り調査と現在の自然環境調査とを行い、田村史子が記述している。また、[はじめ] と [Ⅲ. 共生 (ともいき) の視点から] は、田村史子が担当している。



図1 現在の高雄山とその周辺地図。山頂は本学敷地内にある。

有岡利幸によれば、「里山」での植生の変化を調査した例は極めて少ないという²。本研究は小規模なものであるが、森の崩壊という、今、日本が直面している問題の解決に少しは寄与する可能性のある、ある普遍的な記録を残すことができるかも知れない。また、共生 (ともいき) という視点から考えることで、今、強まりつつある、自然と共存しつつ、地域に根付いた人間的に豊かな生活を模索しようとする動きに、一つのテストケースを提示することができるかもしれない。

I. 高雄山をめぐる歴史

1. 【高雄山の風光】

「高尾山」という名の山は全国各地に存在する。有名な所では東京都民の憩いの場であり、ミシュランの3ツ星を獲得している八王子市の高尾山、京都西郊に位置し、神護寺や高山寺のある高雄山があり、福岡県下でも、宗像大社の西に連なる山並を高尾山というなどである。

「尾」とは「尾根」であり、長尾は長く続く尾根、高尾は高い尾根である。太宰府の高尾山は、この辺りの主峰「宝満山」から派生する尾根 (低丘陵) が、起伏を繰り返しながら連なり、そのひととき高い部分が「高尾山」なのである。この丘陵地帯は、現在では東ヶ丘・星ヶ丘・緑台・高雄台など団地造成され住宅地が広がっているが、『筑前国続風土記拾遺』に「高尾山、村の東

にあり、茅野山なり」と記すように、かつては「野」「野山」などと呼ばれた採草地で、茅山・雑木林が広がっていた。所謂「里山」である。

『万葉集』に次のような歌がある。

女郎花秋萩まじる蘆城野あしきのは今日をはじめて萬代に見む（巻8—1530）

玉くしげ蘆城の川を今日見ては萬代までに忘れめやも（巻8—1531）

高尾山の南斜面にある太宰府ゴルフ倶楽部と高雄台団地に隣接する地は、筑紫野市阿志岐である。阿志岐の地名はかつての蘆城によるとされ、古代大宰府に最も近い宿駅、蘆城駅あしきのうまやがあった所である。高尾山の対面の山「宮地岳」（338.9m）では12年前古代山城が発見され、「阿志岐山城跡」としてこのほど国の史跡に指定された。この二つの山の間を、宝満山に源を発する宝満川、則ちかつての蘆城川が流れ、その兩岸に若干の平野が広がっている。万葉集に詠う蘆城野は、現在の私たちの感覚で言う平野部分のみを指すのではなく、その両側の山（低丘陵）をも含むより広範囲の地であったと考えられる。秋には女郎花や萩の花が咲き乱れ、秀麗な姿の宝満山から流れ出す蘆城川の清らかな流れが潤す地。萬代までも忘れることができない。そんな場所がこの高尾山一帯だったのである。

本研究の表題では「高雄山」としている。「高雄」は、江戸時代後期に開墾された土地で、太宰府町五条の枝村でカタンダン（片ノ谷・片野谷）と言われていた。また高尾山を太宰府の人はカタンダン山とも呼んでいた。戦後、地区名を決める時、片ノ谷では聞こえが悪いとして、高尾山に因んで「タカオ」とすることにしたが、その際「高尾」よりも良い字、京都にもある地名として「高雄」が採用されたという³。しかし明治37年の大日本帝国陸地測量部が発行した地図にはすでに「高雄山」と表記されており、現在も「高雄山」「高尾山」の表記は曖昧である。

高度経済成長期、この丘陵に宅地開発や大学誘致が始まる頃の様子を太宰府町湯の谷の住人であった上村高直は昭和47年5月に発行した『太宰府いまむかし』⁴に次のように記している。

天満宮やその他の社寺の境内以外には、丘陵にはほとんど巨木はなくなり、あちらに一叢こちらに数本と自然生えの小松の木立ちがあつて、その他は丈に余る篠竹やいばら、かずら、雑木が密生して、人畜の通るのを阻んでいる。そして春はわらびやつつじ、秋は栗、あけびと村童や山芋掘りががむしやらに通った小径を行けば、萱かずらや藤かずらに足を取られ、いばらの刺に服は破れ手足は血に染まるていたらくで、これらの山々はたやすく人になじまない。たまたま心ある山の持ち主は杉桧の植樹に心がけ、山峡一面昼なお暗いばかりに育っているところもあるが、多くの山肌は遠目には草の褥とも見える美しさであっても、近づいて見れば笹と雑木と荊棘におおわれた荒れた丘陵である。それは遠く美しい景観と見るより荒廃と見るからであろうか、ここ三四年来、丘陵をくずして山田を埋め立て宅地造成に拍車をかけている。学業の神天満宮の所在地として、私立大学の設置されたもの、その計画のあるもの数ヶ所となっている。昼となく夜となくブルドーザーが鳴り響けば丘陵は次々に姿を消して行く。このあたりは春ともなればうぐいすが鳴きその他の小鳥の声ものどかで、時に山鳥が飛び出して人を驚かす。また秋は住宅の周囲に昼間でも鈴虫の音を聞いていたけれども、それらは時と共にこの界隈から消えて行っている。

石穴稲荷は里近くにはあるけれども、それは三四年来のことで、それまでのこのあたりは、山の奥深い森厳なところで、稲荷詣でも手輕ではなかったであろう。何故なら三年前までは神社の前にあって稲荷を奥深くしていた可成り高い三つの丘陵があったからである。それが二三年のうちに次々に根こそぎ崩されて周囲の水田が埋められ、神社の前一帯は明るい分譲住宅でいっぱいになり、道路も四通八達したからである。

高尾山にある複数の大行事石塔（本学構内・ゴルフ場・下高尾）の銘などから、かつてこの丘陵は入会地で、数ヶ村の人々が入り秣や燃料の調達を行っていたと考えられるが、聞き取り調査によると「戦後は入会地はなく、農地改革とタバタハチケンで、隣接する人には所有権有りとして個人に払い下げられた。低いところにはクロマツ、高い所にはクスギ林があったが土地が悪くあまりフトラナイ。子どもたちはミソツチョ山と呼び、おやつ代わりに実を食べたりして良い遊び場だった」という⁵。昭和30年代後半から、燃料や肥料、産業構造の急速な変化によって、貴重な採草地であったこの丘陵も人々にとって必要のないものになり、顧みられることなく荒廃していった。その有効利用としては、福岡市のベッドタウンとしての宅地開発、また学問の神太宰府天満宮をシンボルとする太宰府町の「文教都市」という「まちづくりのため」の学校誘致⁶ということで、上記文章にあるような、また今日の姿として変貌を遂げたのである。

2. 【高尾山往来】

時間を数百年戻して、この山のもう一つの側面を見てみると、難所ながら交通の要衝であった高尾山の様子が紀行文などに記されている。

文明12年（1480）、太宰府天満宮に参拝した折り、この山を越えた連歌師飯尾宗祇はその紀行文『筑紫道記』⁷に、「かくてあしき山といふ駅路にかゝりぬ、水の緑、紅葉の色々おもしろきわたりなれと、谷嶺けはしく、ふむ所みな岩の棧路なり、心はそさまさりて、進退の事さへ思ひ歎て“世の中ハあしき山路に乗駒のふみもさためぬ身にこそ有けれ”とかく過行程に、御社ちかく塔婆などみゆるより、おりて神前を拝して」と記している。

江戸末期の嘉永5年（1852）神無月はじめ、黒田藩士で歌人の山路重固は友人の長野種正⁸・石川恒道等と朝倉地方に遊んだが、その時、太宰府天満宮から光明寺へ寄り紅葉を愛でて「六本松越」を通り、阿志岐村に至った。六本松は、高尾山の東南斜面にある太宰府ゴルフ倶楽部を下った辺りに「六本松」のバス停がある。おそらくこの辺りに旅人の目印として松の木が植えられていたのであろう。山路重固一行は光明寺の横から山道に入り太郎左近社の横、本学の辺りを通ったと思われる。

六本松越と云処にて熟したる柿の実を八十丸に遺すとて、種正

君くやと待しこゝろも山柿のうみはてし身をあはれとを（ぞカ）見よ
山を越て阿志岐村にいたらんとするとき、たね正

君とわがこゆればやすし乗物（駒カ）もなづむと聞しあしき山路も⁹

長野種正のこの歌には、かつてこの道を越えた宗祇の『筑紫道の記』が念頭にあったものと思われる。

宝満山は、約9300万年前（白亜紀後期）に地下数kmの深所でマグマがゆっくりと冷え固まって形成された北部九州主部花崗岩類の早良花崗岩が隆起し、浸食をうけて形成された山である¹⁰。花崗岩は風化が激しく良質の真土と成っている所が多いが、宝満山自体は、今なお花崗岩の巨岩に覆われた険しい山として知られ、その低丘陵部にも岩石の多い部分が残っている。本学の西に隣接する石穴稲荷の奥の院には巨岩が累々と重なり、本学キャンパス内にも一部風化しかかった花崗岩の堆積部が見られる。

本学正門の道向こうの石坂地蔵のある所は、「泣き別れ」と言われた分水嶺である。かつてここに峠の茶屋があり、岩間から出る清水に喉を潤し夏は冷たいトコロテンが名物であったという。その茶屋の子孫が語り継いでいることとして、「峠のむこうの森の中からやってくる人は、まるで蟻が穴から出てくるように一人一人姿を現した」という¹¹。木々が生き茂り、狭い山道は、通り抜けるのがやっと。太宰府天満宮を目前にしての難所であった。

ここを少し下りた所、九州国立博物館の入口付近に太宰府天満宮の摂社「太郎左近社」がある。社には木で作った足形や手形、火吹き竹が置いてあり、足の悪い人は足形で足を、手の悪い人は手形で手を撫で、耳の悪い人は火吹き竹で吹けば治ると言われている。おそらく険しい山路を越え足を痛めた者も多く、足を足形で撫で神に祈った事から、現在もこうした信仰が続いているのであろう。社の側には、慶応4年（1868）に長州赤間関（下関）の商人たちが寄進した常夜燈が建っている。

太宰府天満宮に参詣することを「さいふまいり」と言ったが、さいふまいりの道のうち、筑後や北九州方面からの参詣者の多くはこの道を通り、溝尻^{かまきぐち}の構口から天満宮境内に入った。常夜燈を寄進した人たちは下関から関門海峡を渡り、小倉常盤橋をふりだしに長崎街道を黒崎、木屋^{こやの}瀬、飯塚と進み、筑前六宿^{ちくぜんむしゅく}のひとつ内野宿（飯塚市内野）から右手に分岐して米ノ山峠を通り宝満山の東南山麓を通り石坂峠を越えた。天明6年（1786）秋、ここを通った金谷上人は「はなはだしい山中で、到るところ大石が行く手をふさいでいる。大石も大石、十間四方、八、九間、五、六間のものがゴロゴロしており、両側の人家で旅人に売るのは、菓子ならぬ卵である」と記している¹²。大変な難所を越えて太郎左近社の所に至ったのである。

一方筑後からの参詣人は、田園地帯を阿志岐まで来て六本松越にかかる。太宰府ゴルフ場4番ホールに大行事石塔・阿弥陀三尊石塔、10体ばかりの石仏を祀ったところがあり、旧道はそのすぐ下を通っていたという。おそらくこの大行事等は村境の要所に祀られていたものであろう。その下の道は現在では通行不能になっているが、道の続きはゴルフ場の中を通り入口付近に至っている。そこまでは茅野山の中の道であったと考えられるが、そこからは岩山の難所であった。

明治27年（1894）ここに清水谷隧道（トンネル）が掘られた。隧道は、現在の九州国立博物館と九州歴史資料館跡の間の谷間から宮ノ森団地辺りに抜けるものであったが、工法の欠陥から間もなく陥没し、ただ入口の「清水谷」のレリーフ額を人知れず遺すのみとなった。

太宰府町制六〇周年記念の『太宰府のあゆみ』に、大正5年（1916）9月4日、石坂道路更正竣工す。「石坂さえ除かれにけり」と評し得て本町多年の宿望を達し一大幸福と云うべし」とある。

湯の谷公園には石坂道路更正を記念して大正7年（1918）に建てられた石碑がある。当時の太宰府町長古川勝隆が撰し、吉嗣鼓山よしつぐこざんの書になる碑文には「石坂は筑前に在り、筑紫郡に属す、往古の官道なり、岩石嶮りつしゅつ（山が高く峻しいこと）として、通行甚だ難し、皇政維新百度更張五十年、茲ここに本郡、始めて其の道を修す、大正五年五月起工、九月に至り岩石を竣鑿し、峻坂を拓くは前後八百七十四間、本町専ら之に任じ、既に平坦成ること砥車馬の如し（下略）」¹³と、明治維新から50年、はじめてこの峻しい石の坂に挑んだ想いと完成した喜びが記され、筑紫郡長、太宰府町長以下、郡・町要職にある者、町会議員等24人の名が記されている。

道路ができてから避病院が建ち¹⁴、塵芥捨て場¹⁵ができた。道から南側の山道は「中ノ峯」といって、石穴神社に通じていた。子どもたちは秋になるとミソッチョ（シャシャンボ¹⁶の実）を食べながら遊んだ¹⁷。この道は現在青柳肥料店のある辺りから、向いの墓地の後の山を通る道で、石穴神社に参詣するには、皆この道を通り、高尾山に登るには、石穴神社の左横から山頂に上る道があったという¹⁸。

3. 【石穴神社】

石穴神社は本学の西に隣接する神社である。祭神は宇迦御霊大神すなわち稲荷大神である。校門のすぐ横に「石穴神社」と刻された社号碑があるが、一般には「石穴稲荷」と言われている。

由緒は不明であるが、福岡市の奥村家¹⁹に伝わる伝承では「石穴稲荷は伏見稲荷であり、菅原道真が太宰府で餓えないように、伏見から稲穂をくわえて配所に運んでいた。道真公は後年、自分を祀る太宰府天満宮が石穴に祀られた伏見稲荷より大切にされると気が引けるから、まず石穴神社に先に詣って、その後で、太宰府天満宮に詣ってほしいとお考えなので、奥村家ではそうしている」ということである²⁰。伏見稲荷と同様の行事「お火焚き」があり、初午と11月23日の秋季大祭の時に富の木しるし（験の杉）²¹が授与されることなど、伏見稲荷の影響が色濃く見られ、伏見稲荷から勧請したものと思われるが、その明確な経緯は明らかでない。『筑前国続風土記』など江戸期の地誌類には記述がなく、明治初期の『福岡県地理全誌』には「稲荷神社」の記載がある。また境内で最も古い鳥居に「文政七甲申（1824）九月吉辰 取次社家 吉嗣茂太夫覚宣」の銘がある。また本学敷地内の高雄山山頂にある大行事石碑には文化11年（1814）の銘がある。それらから類推すると、江戸後期に高雄山に採草地として人が立ち入ることが始まり、稲荷神社が勧請されたものと思われる。

取次社家の吉嗣茂太夫覚宣は現宮司の先祖に当たり、元々太宰府天満宮の社家「神人」^{しにん}の一つであった。宮司家には「三条実美公御幣物奉納の唐櫃」なるものが遺っているが、幕末の尊王攘夷派の公家の旗頭で、太宰府天満宮延寿王院に落ちていた三条実美が愛刀をなくした時、石穴稲荷に祈ったところたちどころに戻ってきたので、その御礼ため御幣物を納め奉納した物という²²。

上村高直の記すように、三つの丘を越えたところにある石穴稲荷は、大変寂しいところであったが、霊験あらたかと云うことで、太宰府の町の人々をはじめ博多・粕屋方面からも信仰を集めていた。年二度の祭日には溝尻口から石穴神社まで幟旗が立ち、道には露店が出て参拝者がひ

っきりなしに続き、境内では甘酒などのお接待があり、三味線など持ち出し賑やかなことだった²³。境内には石高稲荷・清水稲荷・中山稲荷など後に勧請された稲荷社があり、祈願所（お籠堂）もあり、盛んだった頃を偲ばせるが、祈願所は長く使われていないようである。本学キャンパスの部分が茅野山であったのと異なり、社叢はクスノキ・カエデ・クリ・イヌマキ・イヌビワ・エノキ・アラカシ・ホオノキ・スギ・コナラ・クロキ・ムクノキ・イチイガシ・エノキ・ハゼノキなどがうっそうと生い繁り²⁴、奥の院の磐座群と相まって森厳な雰囲気である。

4. 【山頂の歴史遺産】

高雄山の山頂付近には高尾山城跡と大行事石塔という二つの歴史遺産がある。高尾山城跡は、本学キャンパス山頂から東へ続く尾根の最高部標高158m周辺にあり、雑木林の中に土塁や横堀の跡が見られる。天正14年（1586）薩摩の島津氏が岩屋城の高橋氏を攻めるときの陣として築城されたと考えられている²⁵。

「大行事」は塔高107cm・台座32cmの自然石の塔で、石面表に「大行事」、裏面に「文化十一年甲戌九月 太宰府 観世村」の銘がある。文化11年は1814年である。

この大行事では現在も太宰府天満宮の神幸式大祭の事始めとして、神幸式という「大行事」が無事滞りなく行われるようにとの祈願祭が行われている。太宰府天満宮の神幸式に先立って、8月の終わりから2週目の土曜か日曜日に太宰府天満宮境内の絵馬堂で注連打ちがあり、最終日曜日に注連打ち相撲が行われるが、この日の朝9時より氏子会役員・祭祀係・当番区の代表が神職と共に大行事に登って祈願祭が行われるのである。

現在では日程が2日に分かれているが、かつては8月31日の早朝より、当番区は青年会場やニワの広い家に集まり、若手・中老・区の役員など総出で一日がかりで注連縄を編んだ。まず一番に大行事用・相撲の水桶用をつくり天満宮に運び、本殿でお祓いを受けた後、高雄山山頂の大行事まで運び、大行事石塔にこの新しい注連縄をかけ、供物をあげ、祝詞を奏して、神幸祭の無事を祈り、大行事の前で相撲の型を奉納して後、天満宮で注連打ち



写真1 大行事のまつり

奉納相撲が始まった。天満宮の秋の大祭神幸式にとって、それほど大切な存在がこの「大行事」石塔なのである。現在の大行事の祭では相撲の型を演じることはないが、修祓、祝詞奏上、大祓詞奏上のあと、「清め祓い」として、神職が祓串で西北位、太宰府の方位を大きく祓い、続いて南西位、榎社（行宮）の方位を祓う。南西位を祓うことは平成15年より始まった。その後、玉串拝礼、一同一拝で終了する。祭終了後の直会では、供物を下げ、参列者全員で頂くが、供物は御神酒・昆布・するめ・米・塩・水。それに最近のお供えは缶詰類が多い。御神酒・缶詰は「全部食べらな、神幸祭で雨の降る」と言われ、お互いすすめ合いながら、賑やかな宴がもたれる。

何故、この大行事が天満宮の祭と関わりあるのか。何故、太宰府（宰府村）と観世村（観世音寺村）の人によって建てられたのかであるが、享和2年（1802）の『明細記』に「宰府社領分」則ち天

満宮社領として山坪数53000坪があげられており、「内 車路・石坂・なし原19900坪 松木立社家中預り山」と記載されている。車路、なし原はどこであるか不明であるが、石坂は本学正門付近から湯の谷団地にかけての小字名であり、江戸期この辺りが太宰府天満宮の社領であったことが知られる。本学キャンパスの大部分は小字石穴であるが、石穴稲荷が菅原道真と有縁の由緒で語られ、かつ宮司が天満宮の社家の出身であることも、この地と天満宮の関係を物語るものである。また同史料によると観世音寺村には野・野山の記載はなく、明治13年の『福岡県地理全誌』に「草山3町3反3畝10歩」と記されている。人口が多く豊かな田畑を持つ村である観世音寺村には、牛馬の飼料等を調達する野山（草山）が極端に少なかったのである。そのため天満宮領であったこの山に^{いりあい}入会をさせてもらったことの「証」として建てたものではなかろうか。また宰府村は天満宮のお膝元であり、ここの氏子たちも入会していたということが知られる。近代の上知令や農地改革によって天満宮領から氏子たちの土地になったものと思われるが、大行事は天満宮の神幸式の事始めの祭の場としてあり続け、今日に至っているのである。

Ⅱ．高雄山の環境変化

現在の高雄山はそれぞれ環境の異なる、大きく五つの部分に分けることができる。ここでは、主として、調査の進んでいる本学敷地の部分の環境変化と現状について述べる。

1. 【1960年代からの変化】

本学がこの山の一部を短大の候補地として購入したのは1960年代の半である²⁶。プロパングスの普及と農作業の劇的な変化（農作機械の導入と化学肥料の使用開始）により、里山としての役割を終え放置されて、山の荒廃がすすんでいた頃である。また、朝鮮戦争時の杉材需要に対応するために杉・ヒノキの植林が奨励され、政府からの補助金も出されたため、ここにも、今見るように多くが植樹された。その後の木材供需事情の大きな変化により（外材の輸入開始による国内の材木価格の暴落）、この時期に植林された樹木が木材として利用されることはほとんどなく、樹齢50～60年ほどの杉・ヒノキ林が、現在まで放置されている状態であることは、全国に共通する。

当時を知る人は、「高雄山の頂上の大行事には時々お参りをした。頂上から見渡す限り、小高い山々が続いていて低いところに田圃があった。ところどころに家がぼつぼつと見えるだけだった。今の大学の山には杉とヒノキが植えられて数年しかたっていないくて、頼まれて毎年下草刈りをやったが大変だった。」、また、その区域の土地の由来について、「（戦前は入会として使っていたが、）戦後は馬場地区（天満宮の参道から九州国立博物館にかけての地域）の地付きの住民の協同組合の所有となっていた。（大学に）売ったお金で公民館を建てた。残りはとってあって、地区の行事などにつかっている。」と語る²⁷。見渡す限り続いていたという小高い山々はそのあと次々と崩され谷間を埋めて住宅団地が作られた。今、高雄山の上に立つと、低いところはほぼ家々に覆い尽くされて、残る丘陵はわずかである。

従来の里山は役割を終え、新しい植林は商品価値を失い、住民たちは山を持て余すようになる。

一方、日本の高度成長によって経済力を増した都会の住民は、住宅、店舗、レジャー場、さらには、増え続ける廃棄物の処理場として、広い土地を必要とした。進学率が上がり、ベビーブームの結果としての学生の急増によって、学校の敷地も必要とされるようになった。必要のなくなったものを、必要とするものが買い取る、これは、自然な推移であろうか。高雄山の今の状態は、まさに日本の1960年代を象徴する。ただし、この山には、石穴神社と大行事、という古来の祀りの場が存続していることを、忘れることはできない。

1965年に福岡市高宮に開校した筑紫女学園短期大学がここに移ってくるのは1975年である。ほぼ10年の間、杉・ヒノキは近隣の住民の世話をを受けて育っていったわけである。10年足らずで高宮から移転することになった理由は学生数の増加、などいろいろあるようだが、その一つに、「いつまでも着工を延ばしているとせっかく用地を提供して頂いた地元の人達、町会議員の間に不信感が広まる恐れがある。²⁸」というのが見える。「文教都市」という「まちづくり」のために、大学を誘致しようとした太宰府町の熱意²⁹が映し出される。また、頂上の大行事には、太宰府天満宮が年に一度の「神幸式」の折に参拝するので、本学の敷地内に入る、ということを約束している。このように本学は地元と深いつながりを持ちつつ、高雄山に学舎を持つことになるのである。山腹を切り崩しての整地には地元の建築会社が当たっている。当時を知る人々によれば、クスノキ、などの植樹が行われたという。いま、それらの植物は成長し、本学の景観の一部を形成している。

この地に本学の大学が開学するのは1988年である。これに先立ち、教育活動に使われる敷地を拡大するために、背後の山の中腹にいくつかの建物とアーチェリー場が作られ、校舎部分と森の部分とが幾分かの融合を見せる。しかし、近年、これらは活用されなくなり、融合感は失われている。

このような40数年の歴史の結果として、40ヘクタールほどの本学の背後の森はある。それは、「里山」の中に杉・ヒノキが植林された状態で放置されると、森はどのように荒廃するか、を示すと同時に、どのように自然が回復するか、ということも示している。「里山」は人が管理を続けた山である。それは同時に、人がその利便のために痛め続けた山であるともいえるからだ。

遠くから見ただけではわからないが、今の高雄山は、1. 石穴神社の鎮守の社叢の人手の入ったことのない原生林の部分、2. 「里山」的景観を残しながらも人工的に景色を作り上げたゴルフ場の部分、3. 完全に整備された太宰府市美化センターと団地、小中学校の部分、4. 「里山」からの自然回帰が進みすぎて人の入るのを拒否するようになっている部分、5. 本学の融合的な森の部分、の五つ相が混在して成り立っている（図1参照）。そして、その下に、統一感を持った古代から農村風景のなかに横たわる幻想の山が重なっているのである。

2. 【現在の自然環境】

2010年12月から2011年1月にかけて、地域環境調査の専門家、廣永輝彦氏の協力を仰いで、高雄山の本学敷地部分の冬季の自然環境調査を4回に亘って行った。本研究の初段階として行われたもので、対象は植物と鳥類に限定されている。その限られたデータの中からも以下のことが見えてきている。

1. 「里山」と杉・ヒノキ林が放置され、荒廃が進むと同時に山の自然が回復し、多種の植物が繁茂し、多くの鳥類が餌場としている。
2. 植物の種類は少し多様性に欠ける。
3. 最低限の管理はしていたし、現在はだいぶ崩壊しているが大学が開学するときに遊歩道が作られたので、高雄山の別の区域のように、回復してきた自然によって（あるいは山の荒廃が進みすぎて）、人の入るのを拒否するような状態にはなっていない。
4. 杉・ヒノキ林は管理されていないので密集しすぎて、林床が暗く植物が少ない。
5. 孟宗竹が繁茂し、杉・ヒノキ林や他の区域を侵食している。このまま進むと、土壌の流失などを招く。

（１）植物の状況

現地調査の結果、表１に示す65科129種の植物が確認された。確認された植物は主として平地から低山地にかけて一般的にみられる種である。調査地は古くから人為的な影響を受けており、大部分はヒノキ、スギ、モウソウチク、クスノキなど、過去に植栽された樹木を中心として構成されていた。また、人里周辺の丘陵地や耕作地等に生育するノゲシやコオニタピラコ等と、山地の樹林地周辺等に生育するツツブキやヤツデ等の、蕾や開花、結実が確認された。注目すべき種として、ニッケイ（環境省：準絶滅危惧）の幼木がモウソウチク林内で確認された。

さらに、域内からいくつかの特徴的な区画を選び、その区画内に生育する植物の記録を取る植生調査を行った。選んだ区画は、①「ヒノキ・スギ植林」②「モウソウチク林」③「ヒノキ・スギ植林（モウソウチクの侵入あり）」④「クスノキ林」⑤「伐採跡（山頂付近）」の５である。紙面の関係で結果は掲載していない。

（２）鳥類の状況

現地調査の結果、表２に示す３目14科26種の鳥類が確認された。確認された鳥類は、コゲラやウグイス、ヤマガラ等の樹林性の種、ハクセキレイやホオジロ、カワラヒワ等の耕作地やその周辺によく見られる種、ヒヨドリやカラス類など住宅地周辺にも出現する種等がみられた。特に、調査時期を反映して多数の冬鳥が含まれており、ルリビタキ、シロハラ、ミヤマホオジロ、クロジ、マヒワ等は確認個体数が多かった。

調査時には、ハゼノキやカラスザンショウの実をついばむメジロ、ルリビタキが観察されたほか、ミヤマホオジロ、クロジが林床で採餌するなど、高雄山一帯の樹林地は鳥類の餌場・生息地として利用されていると考えられる。また、福岡県のレッドデータに該当する種としてカササギ（保全対策依存）が確認された。本種は文化財保護法にもとづく地域指定天然記念物（久留米市ほか9市町村）に指定されているが、太宰府市はこの地域に含まれない。

今回、フクロウ類の調査として、夜間に鳴き声の音声ＣＤを流し、反応を記録する方法を実施したが、フクロウは確認されなかった。ただし、樹林にはフクロウの営巣が可能なクスノキの大木があること。また、事前の聴き取りでは鳴き声を確認した事例があることから、留鳥のフクロウ及び夏鳥のアオバズク等については、今後も生息の可能性に留意する必要がある。

表 1

No.	分 類	科 名	和 名	学 名	備考
1	シダ植物	イワヒバ科	タチクラマゴケ	<i>Selaginella nipponica</i>	
2		ハナヤスリ科	フユノハナワラビ	<i>Botrychium ternatum</i>	
3		ゼンマイ科	ゼンマイ	<i>Osmunda japonica</i>	
4		キジノオシダ科	キジノオシダ	<i>Plagiogyria japonica</i>	
5		ウラジロ科	コシダ	<i>Dicranopteris linearis</i>	
6			ウラジロ	<i>Gleichenia japonica</i>	
7		コバノイシカグマ科	フモトシダ	<i>Microlepia marginata</i>	
8		ホングウシダ科	ホラシノブ	<i>Sphenomeris chinensis</i>	
9		ミズワラビ科	イワガネソウ	<i>Coniogramme japonica</i>	
10		イノモトソウ科	イノモトソウ	<i>Pteris multifida</i>	
11		シシガシラ科	シシガシラ	<i>Struthiopteris niponica</i>	
12			オオカグマ	<i>Woodwardia japonica</i>	
13		オシダ科	オオカナワラビ	<i>Arachniodes amabilis</i>	
14			ハカタシダ	<i>Arachniodes simplicior</i>	
15			オニカナワラビ	<i>Arachniodes simplicior var. major</i>	
16			ベニシダ	<i>Dryopteris erythrosora</i>	
17			ナガバノイタチシダ	<i>Dryopteris sparsa</i>	
18			イノデモドキ	<i>Polystichum tagawanum</i>	
19		ヒメシダ科	ゲジゲジシダ	<i>Phegopteris decursive-pinnata</i>	
20			ミゾシダ	<i>Stegnogramma pozoi ssp. mollissima</i>	
21			ハシゴシダ	<i>Thelypteris glanduligera</i>	
22			コハシゴシダ	<i>Thelypteris glanduligera var. elatior</i>	
23		メシダ科	シロヤマシダ	<i>Diplazium hachijoense</i>	
24			ミヤマノコギリシダ	<i>Diplazium mettenianum</i>	
25		ウラボシ科	ノキシノブ	<i>Lepisorus thunbergianus</i>	
26	裸子植物	イチョウ科	イチョウ	<i>Ginkgo biloba</i>	植栽
27		マツ科	アカマツ	<i>Pinus densiflora</i>	
28		スギ科	スギ	<i>Cryptomeria japonica</i>	植栽
29		ヒノキ科	ヒノキ	<i>Chamaecyparis obtusa</i>	植栽
30		マキ科	イヌマキ	<i>Podocarpus macrophyllus</i>	
31	離弁花類	ヤマモモ科	ヤマモモ	<i>Myrica rubra</i>	
32		クルミ科	ノグルミ	<i>Platycarya strobilacea</i>	
33		カバノキ科	オオバヤシャブシ	<i>Alnus sieboldiana</i>	逸出
34			イヌシデ	<i>Carpinus tschonoskii</i>	
35		ブナ科	クリ	<i>Castanea crenata</i>	
36			アラカシ	<i>Quercus glauca</i>	
37			コナラ	<i>Quercus serrata</i>	
38		ニレ科	ムクノキ	<i>Aphananthe aspera</i>	
39			エノキ	<i>Celtis sinensis var. japonica</i>	
40		クワ科	ヒメコウゾ	<i>Broussonetia kazinoki</i>	
41			イヌビワ	<i>Ficus erecta</i>	
42			イタビカズラ	<i>Ficus oxyphylla</i>	
43		モクレン科	ホオノキ	<i>Magnolia hypoleuca</i>	

44	離弁花類	マツブサ科	サネカズラ	<i>Kadsura japonica</i>	
45		クスノキ科	クスノキ	<i>Cinnamomum camphora</i>	
46			ヤブニッケイ	<i>Cinnamomum japonicum</i>	
47			ニッケイ	<i>Cinnamomum sieboldii</i>	逸出
48			タブノキ	<i>Machilus thunbergii</i>	
49			シロダモ	<i>Neolitsea sericea</i>	
50		メギ科	ヒイラギナンテン	<i>Mahonia japonica</i>	逸出
51			ナンテン	<i>Nandina domestica</i>	
52		アケビ科	ゴヨウアケビ	<i>Akebia pentaphylla</i>	
53			ミツバアケビ	<i>Akebia trifoliata</i>	
54			ムベ	<i>Stauntonia hexaphylla</i>	
55		ツツラフジ科	アオツツラフジ	<i>Cocculus orbiculatus</i>	
56		ツバキ科	カンツバキ	<i>Camellia hiemalis</i>	植栽
57			サカキ	<i>Cleyera japonica</i>	
58			ヒサカキ	<i>Eurya japonica</i>	
59			チャノキ	<i>Thea sinensis</i>	逸出
60		ユキノシタ科	コガクウツギ	<i>Hydrangea luteo-venosa</i>	
61			アジサイ	<i>Hydrangea macrophylla</i>	植栽
62			ユキノシタ	<i>Saxifraga stolonifera</i>	
63		バラ科	ミツバツチグリ	<i>Potentilla freyniana</i>	
64			ヤマザクラ	<i>Prunus jamasakura</i>	
65			フユイチゴ	<i>Rubus buergeri</i>	
66			ビロウドイチゴ	<i>Rubus corchorifolius</i>	
67			クサイチゴ	<i>Rubus hirsutus</i>	
68		マメ科	ナツフジ	<i>Millettia japonica</i>	
69			クズ	<i>Pueraria lobata</i>	
70		トウダイグサ科	アカメガシワ	<i>Mallotus japonicus</i>	
71		ユズリハ科	ヒメユズリハ	<i>Daphniphyllum teijsmannii</i>	
72		ミカン科	カラスザンショウ	<i>Zanthoxylum ailanthoides</i>	
73		ウルシ科	ハゼノキ	<i>Rhus succedanea</i>	
74			ヤマウルシ	<i>Rhus trichocarpa</i>	
75		モチノキ科	モチノキ	<i>Ilex integra</i>	
76			クロガネモチ	<i>Ilex rotunda</i>	
77		ニシキギ科	マサキ	<i>Euonymus japonicus</i>	逸出
78		ミツバウツギ科	ゴンズイ	<i>Euscaphis japonica</i>	
79		ホルトノキ科	ホルトノキ	<i>Elaeocarpus sylvestris var. ellipticus</i>	
80		ゲミ科	ナワシログミ	<i>Elaeagnus pungens</i>	
81		アカバナ科	メマツヨイグサ	<i>Oenothera biennis</i>	帰化
82		ミズキ科	アオキ	<i>Aucuba japonica</i>	
83			クマノミズキ	<i>Cornus macrophylla</i>	
84		ウコギ科	コシアブラ	<i>Acanthopanax sciadophylloides</i>	
85			カクレミノ	<i>Dendropanax trifidus</i>	
86			ヤツデ	<i>Fatsia japonica</i>	
87			キヅタ	<i>Hedera rhombea</i>	

88	合弁花類	ツツジ科	シャシャンボ	<i>Vaccinium bracteatum</i>	
89		ヤブコウジ科	マンリョウ	<i>Ardisia crenata</i>	
90			カラタチバナ	<i>Ardisia crispa</i>	
91			ヤブコウジ	<i>Ardisia japonica</i>	
92			イズセンリョウ	<i>Maesa japonica</i>	
93			サクラソウ科	コナスビ	<i>Lysimachia japonica f. subsessilis</i>
94		ハイノキ科	クロキ	<i>Symplocos lucida</i>	
95		モクセイ科	ネズミモチ	<i>Ligustrum japonicum</i>	逸出
96			ヒイラギモクセイ	<i>Osmanthus fortunei</i>	植栽
97			ヒイラギ	<i>Osmanthus heterophyllus</i>	
98		キョウチクトウ科	テイカカズラ	<i>Trachelospermum asiaticum f. intermedium</i>	
99		アカネ科	オオアリドオシ	<i>Damnacanthus indicus ssp. major</i>	
100			ヤエムグラ	<i>Galium spurium var. echinospermon</i>	
101			ヤイトバナ	<i>Paederia scandens</i>	
102		ムラサキ科	ハナイバナ	<i>Bothriospermum tenellum</i>	
103		クマツヅラ科	ムラサキシキブ	<i>Callicarpa japonica</i>	
104			ヤブムラサキ	<i>Callicarpa mollis</i>	
105			クサギ	<i>Clerodendrum trichotomum</i>	
106		シソ科	ホトケノザ	<i>Lamium amplexicaule</i>	
107		ナス科	ヒヨドリジョウゴ	<i>Solanum lyratum</i>	
108		オオバコ科	オオバコ	<i>Plantago asiatica</i>	
109		スイカズラ科	キダチニンドウ	<i>Lonicera hypoglauca</i>	
110			ニワトコ	<i>Sambucus racemosa ssp. sieboldiana</i>	
111			サンゴジュ	<i>Viburnum odoratissimum var. awabuki</i>	逸出?
112		キク科	オオアレチノギク	<i>Conyza sumatrensis</i>	帰化
113			ベニバナボロギク	<i>Crassocephalum crepidioides</i>	帰化
114			ツワブキ	<i>Farfugium japonicum</i>	
115			チチコグサ	<i>Gnaphalium japonicum</i>	
116			ウラジロチチコグサ	<i>Gnaphalium spicatum</i>	帰化
117	セイタカアワダチソウ		<i>Solidago altissima</i>	帰化	
118	ノゲシ		<i>Sonchus oleraceus</i>		
119	オニタビラコ		<i>Youngia japonica</i>		
120	単子葉植物	ユリ科	ヤブラン	<i>Liriope muscari</i>	
121			ジャノヒゲ	<i>Ophiopogon japonicus</i>	
122			ナガバジャノヒゲ	<i>Ophiopogon ohwii</i>	
123			サルトリイバラ	<i>Smilax china</i>	
124		イネ科	コブナグサ	<i>Arthraxon hispidus</i>	
125			コチヂミザサ	<i>Oplismenus undulatifolius var. japonicus</i>	
126			モウソウチク	<i>Phyllostachys pubescens</i>	植栽
127			ネザサ	<i>Pleioblastus chino var. viridis</i>	
128		ヤシ科	シュロ	<i>Trachycarpus fortunei</i>	逸出
129		ラン科	コ克蘭	<i>Liparis nervosa</i>	
65科129種					

表2

No.	目 名	科 名	和 名	学 名	渡り区分	備考
1	ハト目	ハト科	キジバト	<i>Streptopelia orientalis</i>	留鳥	
2	キツツキ目	キツツキ科	コゲラ	<i>Dendrocopos kizuki</i>	留鳥	
3		セキレイ科	ハクセキレイ	<i>Motacilla alba</i>	留鳥	
4		サンショウクイ科	リュウキュウサンショウクイ	<i>Pericrocotus divaricatus tegimae</i>	留鳥	
5		ヒヨドリ科	ヒヨドリ	<i>Hypsipetes amaurotis</i>	留鳥	
6		モズ科	モズ	<i>Lanius bucephalus</i>	留鳥	
7		ツグミ科	ルリビタキ	<i>Tarsiger cyanurus</i>	冬鳥	
8			ジョウビタキ	<i>Phoenicurus aureus</i>	冬鳥	
9			シロハラ	<i>Turdus pallidus</i>	冬鳥	
10			ツグミ	<i>Turdus naumanni</i>	冬鳥	
11		ウグイス科	ウグイス	<i>Cettia diphone</i>	留鳥	
12		シジュウカラ科	ヤマガラ	<i>Parus varius</i>	留鳥	
13			シジュウカラ	<i>Parus major</i>	留鳥	
14	スズメ目	メジロ科	メジロ	<i>Zosterops japonicus</i>	留鳥	
15		ホオジロ科	ホオジロ	<i>Emberiza cioides</i>	留鳥	
16			ミヤマホオジロ	<i>Emberiza elegans</i>	冬鳥	
17			アオジ	<i>Emberiza spodocephala</i>	冬鳥	
18			クロジ	<i>Emberiza variabilis</i>	冬鳥	
19		アトリ科	カワラヒワ	<i>Carduelis sinica</i>	留鳥	
20			マヒワ	<i>Carduelis spinus</i>	冬鳥	
21			イカル	<i>Eophona personata</i>	留鳥	
22			シメ	<i>Coccothraustes coccothraustes</i>	冬鳥	
23		カラス科	カササギ	<i>Pica pica</i>	留鳥	
24			ハシボソガラス	<i>Corvus corone</i>	留鳥	
25			ハシブトガラス	<i>Corvus macrorhynchos</i>	留鳥	
26		チメドリ科	ソウシチョウ	<i>Leiothrix lutea</i>	留鳥	外来種
3目14科26種						

(☆この章をまとめるに当たっては、長い間本学に奉職してこられた教職員の方々、また、折々の山の整備にかかわってこられた地元の農林業や造園業の方々に、情報の提供をいただいた。一々のお名前を挙げることは控えさせていただくが、ご協力に深く感謝するものである。)

Ⅲ. 共生（ともいき）の視点から

インドネシアのカリマンタンの奥地の熱帯雨林地帯にダヤックと呼ばれる人々が住む。彼らは焼畑を行い、その灰を肥料として陸稲を栽培する。一つの畑は基本的には一農業年のみ使用し、一家族が、水源としての原生林を間に挟んで10ヶ所ほど持つ畑を順繰りに回る。同じ畑には10年近く経って戻ることになるが、その時分には、畑は二次林として完全に復活している。人と過酷な自然とが妥協して暮らしていけるある一定の状況を保つための文化である³⁰。

このように伐採・火入れと放置による再生を繰り返している二次林は、下から上まで多種多様な植物が繁茂し林床はきわめて混雑し枝々は絡み合っ人々の入るのを拒絶する。人手と火の入ったことのない原生林が、巨木の大きな樹冠にさえぎられて灼熱の太陽の光があまり入ってこないため、熱帯の多様な木々が繁茂しながらもその林床は比較的すっきりとしているのと対照的である。原生林は、その土地土地の樹木にとって最も自然の姿であろう。そこに人が住み始めたとき、森と人との共生のための両者の努力が始まったのだといえる。熱帯の過酷な自然の中では、あるいはそれは戦いと言ってもよいかもしれない。

日本も太古の時代は森に覆われていた。現在でも国土にその森林の占める割合が60%以上だと言われている。「里山」は、森と人との共生のための文化の、日本における一つの形態であるだろう。そして、1960年代にその「里山」を放棄することを選択した日本人は、森との共生のためにそれに代わるどのような文化形態を作り出そうとしたのだろうか。この高雄山という小さな山の周辺に起こった、たった40数年の歴史が、その過程を、まさに典型的に映し出しているといえないだろうか。

最近、「地上デジタルテレビ放送」中継局が高雄山城跡（本稿p53参照）に建てられた。それに先立つ2008年秋、山頂の「大行事」の周りの大きな木々（広葉樹）が、電波を遮るということで半分の高さに伐採された。筆者は、偶然その痛々しい伐採の現場を目撃した。「地上デジタルテレビ放送」という最先端の利便のために、人は、またしても自然を傷つけた。これも、やむを得ない選択として受け入れなければならなかったのだろうか。

しかし、本学の真向かいに2006年に開館した九州国立博物館は、ある別の可能性を提示している。一つの山（丘陵）を太宰府天満宮から譲り受けて建設された当博物館は、1960年代に行われたようにそれを崩して平地にするのではなく、その中に包み込まれるように設計がなされている。また、その外壁はガラスで作られ、周りの木々を映して森と一体化している。このような設計は、平地面積の少なさや森に囲まれた湿気の問題など、博物館としては重大な不利となるような事項を解決し、丘陵の地形と森を生かすという選択のもと、実行されたのであり、その維持のために努力が続けられているのである。

人はなぜ森と、とりもなおさず自然と、共生しなければならないのだろうか、と改めて問う必要があるだろうか。まず、水調節・土壌保全・防風・空気の浄化・生物多様性を育む、などの森の持つ力が人間にとって欠かせないからだ、といえる。しかしそれと同様に大事なものは、森との

共生の中で人が作り上げてきた文化が、人が人としてあるための尊厳を示しているからだ。かつて、人は森の中やそばに住み、自然との交流の中で、自然の一部としての自らを感じ取り、すべての生命とのつながりの中に自分が生かされていることを日々意識しながら生活をしていた。今、機械化された便利な生活の中で、根源的な人の在り方を忘れ始めているのではないだろうか。

本学学園の教育の使命として、「深く自己を見つめることを通して他者とのつながりに気づき、あらゆる生命の恩恵に感謝しつつ、さまざまな課題を抱えた社会の中で、恵まれた<いのち>を生かし自分の役割を果たすことのできる人間を育成します。³¹」がある。長い歴史を持ち、人が生きていく環境としてさまざまなすぐれた力を持つ本学の背後の高雄山を、新しい時代の入会地＝共生（ともいき）の場として生かしていけることができるなら、本学がこの地を選び、学びの舎を営んでいることの意義があるのではないだろうか。

おわりに

本研究は、共同研究者を加え、本学の研究助成を受けて、このテーマに沿ってさらに調査・研究を続けていく予定である。1. 一年を通じての動物も含めたより充実した自然環境調査を行い山の状態を確実に把握する。2. 高雄山の他の部分の来歴、さらに、高雄山を含むより広い地域の大行事石碑の調査。3. 地域の関連活動団体や他大学との連携。などを通じて、森の自然を保ちながらそこで多くの人々が交わっていける環境を作るためのアイデアと、それを維持していくシステムを考察し、その実現の可能性を検討していく予定である。

【註】

- 1 「里山」は近年よく使われる用語であるが、有岡利幸（2004）『里山Ⅰ』ものと人間の文化史118-1、p1-3：法政大学出版局 によると、京都大学農学部林学科の教授が自分の造語であると言ったが、有岡の調査では宝暦9年（1759）の尾張徳川藩の「木曾御材木方」という古文書に山林の区分を掲げて解説し、その中で里山は御留山、御巢山、尾留山御巢山新開、明き山、草山について6番目に掲げられ、「村里家居近き山をさして里山と申候」と解説している。この木曾地方の語が前記京大教授によって復活し、わが国の山は奥山と里山とに2分割されるようになった。とした上で、「本来的な里山とは、里人が日常的にあまり遠くない山に立ち入り、山の産物利用をくりかえすことにより、里人の生活に役立つ山に改変されたものをいう」と定義している。自然環境問題や循環型社会が注目される今日、「里山」という概念が注目されている。
- 2 有岡利幸（2004）『里山Ⅰ』ものと人間の文化史
- 3 太宰府市新町西正寺先々代住職山内興隆師は当時の太宰府を代表する知識人であり郷土史家でもあった。筆者は生前の山内興隆師本人からこの命名が山内氏によるものであると聞き及んでいる。
- 4 上村高直（1972）『太宰府いまむかし』日本印刷株式会社 p141～142
- 5 話者 S氏（大正15年生まれ：五条）

- 6 これには、太宰府天満宮西高辻信貞宮司が先導的な役割を果たした。森弘子（1988）『西高辻信貞・わがいのち火群ともえて』 p 139 太宰府天満宮
- 7 竹内理三・川添昭二『大宰府・太宰府天満宮史料巻13』 p558～559による
- 8 筑前の国学者青柳種信の長男。長野家の養子となる。父種信について国学を学び『博多鴻臚館考』『千種廼舎歌集』等の著書がある。
- 9 山路重固「あさくら日記」前田淑（2009）『筑前の国学者伊藤常足と福岡の人々』弦書房：所収。（ ）は森弘子注。
- 10 太宰府市史編集委員会（2001）『太宰府市史環境資料編』グラビアページ 太宰府市
- 11 八尋千世（2006）『太宰府天満宮むかしがたり・石造物のおはなし』 p 93（財）太宰府顕彰会
- 12 横井金谷著・藤森成吉訳（1965）『金谷上人行状記—ある奇僧の半生』平凡社東洋文庫37
- 13 原文は漢文。森弘子が読み下した。
- 14 太郎左近社の側、九州国立博物館入口辺りに門があり、駐車場になっている所にあった。
- 15 湯ノ谷公園（昔は池）と本学の間。荷馬車に積んできた塵芥を道路から下に落としていた。（話者：Y氏 大正15年生まれ）
- 16 ツツジ科の常緑低木～小高木。和名の語源は「小小^{きき}ん坊」。小さな果実に親しみを込めたものと思われる。果実は甘酸っぱい。
- 17 八尋千世（2006）『太宰府天満宮むかしがたり・石造物のおはなし』 p 93（財）太宰府顕彰会
- 18 話者 S氏（大正15年生まれ：五条）、八尋千世（大正15年生まれ：連歌屋）
- 19 先祖は黒田長政所有の飛竜丸の船頭を務め、のちタバコを扱って富を築き、黒田藩の御用銀を預かる両替商となる。後一族をして醤油醸造業を営んだ。『筑前名所図会』を著した奥村玉蘭もその一族。
- 20 山中耕作（2001）「配所の菅公を飢えから救った伏見稲荷—石穴稲荷神社の消息—」『大いなり第149号』伏見稲荷大社講務本庁
- 21 20cmほどの杉の小枝に御幣を付けたもの。近年は金の御幣に代わった。
- 22 山中耕作（2001）「配所の菅公を飢えから救った伏見稲荷—石穴稲荷神社の消息—」『大いなり第149号』伏見稲荷大社講務本庁
- 23 太宰府市史編纂委員会『太宰府市史・民俗資料編』
- 24 棕の会（2007）『太宰府の樹木と鎮守さま一人に出会い、木に出会い 太宰府市景観樹木の調査に関する報告書』太宰府市市民生活部環境課
- 25 下高大輔「高尾山城—ひそかなる古城—」『広報だざいふ2008.12.1』
- 26 筑紫女学園百年史編集委員会（2009）『筑紫女学園百年史』 p 218
- 27 話者 A氏（●●）
- 28 筑紫女学園百年史編集委員会（2009）『筑紫女学園百年史』 p 236
- 29 本稿 p 49～50
- 30 田村史子（2002）「カリマントン・輝ける音の時空」『民族音楽の課題と方法 音楽研究の未来をさぐる』世界思想社

31 <http://www.chikushi.ac.jp/vi/index.html> 筑紫女学園大学ヴィジュアル・アイデンティティ

参考文献

ジャック・ウェストビー (1990)「森と人間の歴史」、熊崎実訳、築地書房

田村史子 (2002)「カリマントラン・輝ける音の時空」『民族音楽の課題と方法 音楽研究の未来をさぐる』世界思想社

上田正昭・上田篤編 (2001)「鎮守の森は蘇る―社叢学事始め」

寺嶋秀明 (1997)「共生の森 熱帯雨林の世界⑥」東京大学出版会

(たむら ふみこ：アジア文化学科 准教授)

(もり ひろこ：本学客員教授)